

日韓両国における白沙青松の用例とその展開

The Development and Expressions of "White Sand and Green Leaves of Pine" in Japan and Korea

姜 享慧*・笠原 知子*・齋藤 潮*

Hyanghye KANG Tomoko KASAHARA Ushio SAITO

Abstract: Shore scenery with white sand and green leaves of pine gave a deep impression to both of Japanese and Korean. Set phrases like that "hakusha-seisho" or "baegsacheongsong", meaning such a beautiful scene, exist between the two countries. This study aims to sort out the literatures of the two countries related to this expression and to clarify the origin of phrase and its transformation. It is said that the person who had an influence on the tradition in Japan is Imagawa Ryoushun(1326-?), but oldest record about this phrase is done by Song Huigyeong(1376-1446) who was a literary man of Joseon Era. We performed the keywords search of the Boolean operator by using a Korean classic database and considered the data of the two countries. Therefore, many examples which were not known to Japan were found, and the earlier poem which is written by Yi Saek(1328-1396) who was a literary man of Goryeo Era was discovered. Jeong Mongju(1337-1392), a close friend of Yi Saek, visited Japan as a diplomatic delegation and met Kyushyu-tandai Imagawa Ryoushun. The possibility that similar expressions between the two countries has begun to interchange from the end of 14th century is indicated.

Keywords: *Hakusha-seisho(Baegsacheongsong), seashore landscape, Korean classic database*

キーワード：白沙青松(白沙青松), 海岸景観, 韓国古典総合データベース

1. はじめに

(1) 背景および目的

1987年1月, 日本の松の緑を守る会によって, 松林の保護・育成の重要性を認識させることを目的に「日本の白沙青松100選」が選定¹⁾された。また, 2000年7月, 国土の保全を図るとともに白沙青松の復元・創出を目指し, 海岸4省庁(農林水産省構造改善局, 水産庁, 運輸省, 建設省)と林野庁との新規連携事業として「自然豊かな海と森の整備対策事業(白沙青松の創出)」が策定され, 白砂浜と松林の整備を進めるべく全国で23地区(24海岸)が実施地区に選定²⁾された。このような取組みを通して, 白浜と松林を備えた海岸は評価され, また現在目指すべき風景の型のひとつともなっているようだ。

一方で, 2章で後述するように, 白沙青松とは, 単に白浜と松林を具備した環境を示すわけではないという見解も散見される。また, 漢字が日韓両国の共通言語であった時期に, 朝鮮通信使を通じた交流の中で残された記録には白沙青松の表現も多く, その内容の細やかさ, 豊かさからみても, 白沙青松のありようは, 2つの環境の具備には留まらないように思われる。すなわち, 現在の白沙青松への理解は, その字面に引きずられて, その語によって導かれていた海岸景観の多様な見方を排除してきたのではないかという問題意識に至った。

そこで本研究では, 白沙青松の語によってとらえられてきた風景の内容への関心を前提に, その足掛かりとして, 白沙青松という言葉の起源と, その変遷を明らかにすることを目的とする。

(2) 研究方法

本研究は全6章で構成される。まず2章にて, 白沙青松の様相を記した事例を紹介するとともに, 起源に関する既往知見の整理を行った。その結果, 日韓の交流窓口であった朝鮮通信使によって, 白沙青松という風景観が引き継がれていった可能性が指摘されながら, 具体的な根拠の提示や論考が進められていないことが明らかになった。

そこで3章では, 白沙青松という言葉の変遷を明らかにするという目的に対して, 朝鮮通信使の記録をデータとしてその内容を追うという方法をとることとした。韓国古典総合データベース³⁾のキーワード検索によって確認することができる朝鮮通信使の使行録全26冊(『海行叢載』全35冊の一部)から「沙」と「松」を含む記述を収集して内容を確認し, 白沙青松に類する風景をとらえた記述を整理したうえで, 記述間の影響関係を論考した。

さらに4章では, 3章の内容を補完するために, 使行録にとどまらず, 韓国内に現存する個人文集まで検索範囲を広げた。ただし, 3章と同じ「沙」と「松」での検索の結果は6千件近くあることと, 3章で得られた知見を部分的に補完するという理由から, 「白沙」と「青松」のみを検索語とし, 両者を一体的にとらえた記述について, 記述間の影響関係を論考した。

以上の2つのアプローチによって, 白沙青松という言葉の変遷を把握したが, これらの作業を通して, その起源付近においてすでに, 日韓両国が白沙青松という風景を共有していた可能性を示す資料を確認したため, 改めて5章にて起源にまつわる論考を示した。6章に, 本研究での成果と限界, 課題を示した。

2. 日本における白沙青松についての認識

(1) 白沙青松の様相

現在の海岸風景のよりどころとなっている白沙青松とは, どのような風景なのだろうか。

例えば志賀は, 「獨り参河の境に入り, 蒲郡停車場を過ぐや, 四圍の山岳皆な花崗岩に係り, その表面の風化水蝕せしものは, 分離して白種雲母片となり, 石英粒となり, 破璃状なるもの, 珠玉状なるもの, 夕陽残照と相映じ, 茲に真成の『白沙』を成し, 青松其間に點綴して初めて所謂『白沙青松』の風景を現じ来る。湘南, 駿河, 遠州の風景や實は灰沙青松たり, 海道の眞風景たる『白沙青松』は, 参河の南部, 西部に到らずんば能く眺矚すべからず⁴⁾。」と記している(表-1, No. 16)。同じ文献における別の箇所

*東京工業大学大学院社会理工学研究科

表-1 既往知見において「白砂青松」の起源および展開に関わるとされる用例

No.	引用された例文(場所, 所在地)	【出典 引用者】
1	松蔭の清き浜辺に玉敷かき君来まさむの清き浜辺に (橘諸兄別邸の庭の池, 京都府綴喜郡)	【藤原八束『万葉集』(749) 中; 小】
2	…池に比に低屋をたてて妻子をつく。凡そ屋舎十が四、池水九が三、菜園が八が二、芹田七が一。そのほか緑松の島、白砂の汀、紅鯉小鷺、小橋小船、平生好む所盡くの中に在り。… (屋内庭の池, 京都の荒地)	【慶滋保胤『池亭記』(982) 木; 小】
3	ことに白浜の色もけじめ見えたる心地して、雪を敷けらむやうなるうえに、緑の松の年深くて、浜風になびきなれたる枝に、手向草うち繁りつつ、村々並み立てり。(明石の浦, 兵庫県明石市)	【今川了俊『道行きぶり』(1371) 西】
4	松亭は朴加大(注: 博多の意)の北一里にあり。西は大海に浜して平堤は閑広たり。中に雑樹なく誰だ白砂青松のみ。これを名づけて青松亭と曰う。… (箱崎) 松亭の海辺, 福岡県福岡市)	【宋希環『日本行録』(1420) 木】
5	…い垣に高き松の色は青海の翠をふかめ、渚になびく真砂は雪をしけるかとあやまたる。… (豊浦から住吉へ行く途中, 山口県下関市)	【飯尾宗祇『筑紫道記』(1481) 木】
6	赤間関を出発して以来、経るところ山にあるざるはなく山の根には白砂青松を夾み、それがまるく湾曲しながら長くつづいて画中の景を作り人をして眼を熱くさせる。(赤間関～三田尻西津の山の下, 山口県防府市)	【申維翰『海遊録』上巻(1719) 木; 西】
7	谷の中皆白砂 (中略) 松大小万本、蒼翠適らんと欲す (須磨一ノ谷の海岸, 兵庫県神戸市)	【梁田邦美『登鐵拐峯記』(1782) 西】
8	松樹百千、種々の曲蹙根、庭作りの工みに、洗ひし如く、枝葉清らかにて、渚より白砂綺麗に掃てたる如し。磯馴まつのがたの、舞手に似たれば『舞子の浜』の唱にや。古詠は聞及ぬこ、又なき妙景なり。(舞子の浜, 兵庫県神戸市)	【遠山景晋『続本會有り記』(1804) 西】
9	白砂面青松 (丹後の天橋立, 京都府宮津市)	【藤原成繁『天橋遊州』(1825) 有】
10	与謝ノ海ハ、海水・西ニ向ヒテ、深ク入レ五里、又・入江ト言ウ、一条ノ長洲、其中央ヲ横絶シ、白砂青松、一行・並列スル一里、… (丹後の天橋立, 京都府宮津市)	【師範学校編『萬国地誌略』(1874) 有; 西; 小】
11	淡路島と相對シテ、白砂青松、相連ナルコト一里 (須磨浦, 兵庫県神戸市)	【師範学校編『萬国地誌略』2巻(1874) 有】
12	長洲一帯、其南に出テ、白砂・翠松、相連なる一里余 (三保松原, 静岡県清水市)	【師範学校編『日本地誌略』(1874) 有; 西; 小】
13	白砂青松相映シテ (須磨浦, 兵庫県神戸市)	【師範学校編『日本地誌略』(1874) 有; 西; 小】
14	白砂青松、海面二斗出シテ (三保松原, 静岡県清水市)	【幸田露伴『枕頭山水』(1893) 有; 小】
15	実に日本に三景の一つと言わる、景色にて、与謝の海を劃れる白砂青松浮ぶが如く (天橋立の内海, 京都府宮津市)	【志賀重昂『日本風景論』(1894) 木; 有; 小】
16	獨り参河の境に入り、…海道の眞風景たる『白砂青松』は、参河の南部、西部に到らずんば能く眺曠すべからず (全文は本文2章(1)に記載)	【志賀重昂『日本風景論』(1894) 有; 西; 小】
17	この岩の流水に侵食せされ、ついに粉碎となるや、その成素なる雲母、石英、長石、角閃石は各個分離して、下流所在に雪のごとき白砂を散布し、青松その間に点綴していわゆる白砂青松の活面画を描き出し、中国瀬戸内諸島の美を添え来る。	【志賀重昂『日本風景論』(1894) 有; 西; 小】

注【】内の(中)、(木)、(有)、(西)、(小)は中村(1982)、木村(1991)、有岡(1994)、西田(1999)、小田(2004)によって引用されたことを示す。また、例文中の網かけは「白砂」および「青松」に相当する表現を示す。

の記述(表-1, No. 17)と照らしてみても、ここでの白砂青松は、単に松林のある白浜ではなく、花崗岩系の真白な砂を有する、瀬戸内海・参河地方固有の風景である。

また中村は、万葉集の例文(表-1, No. 1)を示しつつ、「第一に、白砂の浜に接する松原の生え際はあからさまなけじめがなく、両者の入り組みぐあいに妙味があるうえに、むさくるしい下生えがなく、白砂の敷かれた涼し気な松の根本あたりを縫って人が安心して出入りできそうな印象を与えること、第二に、松林は、木立の間合いがほどよくとられているため、一々の見事な枝ぶりが水際立って映えていること、第三に、神社参詣、魚撈などを点景として風韻のある人の営みが織り込まれていること」とし、砂浜と松が織りなす表情のありようを丁寧にし、そこに重なる風趣とともに、白砂青松を説明している。

すなわち白砂青松とは、様々な取組みで認められているような、字面通りに白砂と青松を具備している環境全般を指すのではなく、厳密な砂の色や松の根元の様子など、限定された条件を満たした様相を捉えたものだという見解もあることがわかる。

(2) 白砂青松の起源

前述のように志賀は、科学的な論理付けによって白砂青松を特定の地域固有の風景として示したが⁹⁾、既往知見によれば、白砂青松の起源は、志賀以前にさかのぼることができ、その内容も志賀の記す限りではないようだ(表-1)。

木村⁷⁾は、白砂青松の語は、所謂朝鮮通信使節の日本見聞記『日本行録』(1420, No. 4)が初出であるとしている。瀬戸内海の特異な風景を白砂青松とらえたもので、白砂青松という風景観は、東洋人あるいは朝鮮通信使一行の中には既にあったこと、以降通信使の長い歴史において、その時々詩文や記録(例えばNo. 6)によって、白砂青松の風景が引き継がれていった可能性を指摘している。しかし、『日本行録』をはじめとする使行録の和書の入手が困難だった当時の事情から、志賀の理解に影響を与えたとは考えにくいとし、これを日本における白砂青松の起源とは認めてい

ない。その一方で、『日本行録』以前にも、古代の『池亭記』(但し海岸ではない、No. 2)、中世の『筑紫道記』(No. 5)などの記述に、白砂と青松を対比した描写が見られることを挙げ、白砂青松に類似する風景観が窺えることを指摘している。

有岡⁸⁾は、白砂青松を和製造語と見なし、藤原著の『天橋遊州』(No. 9)と志賀著の『日本風景論』(No. 16)の出版年の間に白砂青松の熟語がつくられたと仮定して、小学生向けの地理教科書を調査し、天橋立をはじめ須磨浦や三保松原の説明にも「白砂青松」の記述(No. 10~14)を確認している。なお、砂ではなく沙となっている点については、戦後の当用漢字の改定のときに改められた可能性を示している。

西田⁹⁾は、上述の発見を踏まえつつ、「瀬戸内海」を記した古来の歌枕、近世の紀行文、近代の観光案内書などから見いだされる日本人の海岸風景に対する風景観を考察する中で、白砂青松という熟語としてではないが、「白砂と青松を一体として捉えた」記述(No. 3)を中世の紀行文『道ぶりゆき』で発見した。その後も、古来多彩な海岸を身近な風景として捉える中で、白浜と松に対しては格別な審美的なまなざしが見られること、近世には磯馴松や一本松を愛でて、盆栽のように賞賛する見方が現れ、従来の歌枕や名所旧跡でない瀬戸内海における松原と白砂の賞賛の見方が増える(『登鐵拐峯記』No. 7; 『続本會有り記』No. 8など)が、近代になると、アノニマスな海岸景を見出す中で、白砂青松や長丁曲浦という典型的風景が、瀬戸内海の表徴として固定していき、とうとう山岳景を重視する風潮によって多島海景が台頭され、昔の海岸景に対する豊かなまなざしが徐々に失われていったことも指摘している。

小田¹⁰⁾は、一般には、志賀の『日本風景論』の前年、1893年出版された、幸田露伴の『枕頭山水』中の一文(No. 15)が、白砂青松の語源と考えられていたとし、有岡の発見を評価している。さらに、志賀が明確に概念規定した白砂について、石英粒を主体にした砂感覚に類似する古典として、『万葉集』の歌1首

(No. 1) を例示した。

以上より、日本における熟語としての白砂青松の使用起源は、『萬国地誌略』および『日本地誌略』（ともに1874）あたりにあり、これらの教科書や、幸田露伴、志賀重昂の著書によって広く知られるようになったが、朝鮮通信使節の日本見聞記を含めれば、その起源は『日本行録』（1420）までさかのぼることができることがわかる。また、熟語にこだわらなければ、白砂青松という風景観によってとらえられる海岸風景の起源は、今川了俊の『道行きぶり』（1371）であること、さらに海岸に限らなければ、白砂と青松の対比への審美的まなざしはそれ以前にもあり、以降、海岸風景を捉えるものとして近世まで続いたことが明らかにされている。

一方で、木村が指摘しているような、朝鮮通信使によって白砂青松という風景観が引き継がれていった可能性については、韓国・日本いずれにおいても既往知見は見当たらない。しかし、仮に朝鮮通信使を通じた交流の中で、互いに影響しあいながら、両国における風景観が展開していったとすれば、木村の指摘内容は、日本における白砂青松を理解する上でも極めて重要になってくる。

3. 朝鮮通信使の使行録にみる白砂青松の展開

韓国古典 DB を用いて「沙」と「松」含む記述を検索した結果、把握できた記述は全て 25 件である（表-2 参照）。このうち、(1) 今日熟語のように白砂と青松の語を並べて用いて一体的な風景を描写するもの（◎）は 6 件であり、それ以外に、(2) 白砂+松、青松+沙のようにどちらかの色が抜ける用例（○▲あるいは●△）4 件、(3) 白砂か青松いずれかのみが記述される用例（○あるいは●）9 件、(4) 沙や松が記述されるものの色は含まれない用例（△あるいは▲）6 件、を見ることができる。本稿では試

みに、これら 4 つの組み合わせについてそれぞれ、記述間の影響関係を論考することとする。

(1) 白砂+青松の用例（表-2 ◎印の箇所に対応。以下同様）

既往研究において白砂青松の語の起源とされる宋希環（1420）は、博多に上陸した翌日に、日本の使僧である亮侃とともに、波古沙只（筥崎）の松亭を眺めて、「只有白砂青松故名。」と報告したあと、詩文のなかで「沙堤千頃白。松木萬條青。」のように白砂と青松を対句として書き残した¹¹⁾ (No. 1)。

その後、末詳（1643）は藍島に至る 10 里ほど前で船上から南岸に博多をとらえて、「白沙青松。連亘數十里。」と記している (No. 8)。南龍翼（1655）は藍島を出航して博多を通過する際に、この使行録（1643）と同様の表現を残す (No. 9) とともに、明石で「百餘里間青松白沙。一望無際。」のように白砂と青松の配列順序が逆転された表現を記している (No. 22)。

申維翰（1719）は赤間関から三田尻西津に渡る際に船上からの眺望について「山根處。夾以白沙青松。鸞環霧隱。」と記し (No. 15)、長さや面積の代わりに湾曲した帳幕のように青松が茂っているイメージを加えた。

続いて曹命采（1748）は小倉を通過する際に船上からの見た目に対して「白沙蒼松。平鋪十里。」のように青を蒼と変形させた表現を使った (No. 14)。

これらの用例では「白砂青松」を一目にとらえて、「堤千頃・木萬條・（數）十里・百餘里間」のように各々の長さや面積といった規模に関心が寄せられていることが特徴的であり、そこに湾曲した松林のイメージが加えられるという展開をみることができる。

(2) 白砂+松、青松+沙の用例（○▲あるいは●△）

申叔舟（1471）は博多に対して「北有白沙三十里。松樹成林。」

表-2 朝鮮通信使の使行録にみる白砂青松の用例

No	原文	地名	記録日付・天候	出典（初・重刊行年度）
1	平堤開曠。其中無雜樹。◎只有白砂青松故名。；[詩]○沙堤千頃白。●松木萬條青。	博多	3月4日・晴と推定	宋希環『日本行録』（1420）
2	○北有白砂三十里。▲松樹成林。日本皆海松。▲唯此有陸松。＊日本人多上畫。＊以為奇勝。		1443年2-10月使行～刊行間と推定	申叔舟『海東諸國記』日本國紀（1471）
	▲鶴家臺呼松萬株。（贈詩：申叔舟→日本僧侶の海雲）		-	申叔舟『保閑齋集』卷7（1487初1645重）
	○▲白沙十里松萬株。（贈詩：申叔舟→日本僧侶の壽蘭）		-	申叔舟『保閑齋集』卷11（1487初1645重）
3	遠望南邊一帶。稍分山岸。○白沙如雲。島嶼環環。皆筑前之界也。		3月小23日・晴	慶暹『海槎錄』（1607）
4	[伝言：日本僧侶玄方の詩] ▲十里松林七里灘。		10月小28日・雨	姜弘重『東槎錄』（1624）
5	○浦越西北有白沙平原。		10月27日・晴	任統『丙子日本日記』（1636）
6	[次從事黃亦韻] ▲十里松林對赤關。		同下と推定・晴	金世謙『槎上錄』（1636）
7	以前行日記中玄方所言參考。…▲所謂十里城下松浦者。亦在博多地方。		10月27日・晴	黃亦『東槎錄』（1636）
8	未至藍島十里許。南岸之上。◎白沙青松。連亘數十里。		5月大18日・晴	末詳『癸未東槎日記』（1643）
9	◎白沙青松。連亘數十里。；[詩]▲遠出青雲錦出。○平沙鋪白雪霜堆。		7月26日・晴	南龍翼『扶桑錄』（1655）
10	△一帶平沙橫亘數二十里。前浦闊狹幾二十里。＊眼界曠明。＊地死佳勝。		8月17日・夕立後晴	任守幹『東槎日記』（1711）
11	箕坐蓬窓下。縱目流眺。右邊悉青山。○山根往往帶白沙。竹木森挺。人家出沒散間。＊杳然若可閃閃一現耳。		8月11日・晴	申維翰『海槎錄』[上]（1719）
12	○白沙翠竹。綿亘十里。	小倉	11月大2日・晴	姜弘重『東槎錄』（1624）
13	▲爰有古松高材橋抽之園。森森翹挺。＊認作琪林玉樹。＊千家綺織。＊陰翳其間。＊不啻畫中玄圃。		8月18日・晴	申維翰『海槎錄』[上]（1719）
14	◎白沙蒼松。平鋪十里。		4月5日・晴後曇	曹命采『奉使日本時間見録』（1748）
15	蓋自赤關以後。所經無非山。山根處。◎夾以白沙青松。鸞環霧隱。＊作畫中景。＊令人眼熱。	赤間関～三田尻西津	8月24日・晴	申維翰『海槎錄』[上]（1719）
16	經文字城。岸上有廟。▲繞以松林。浦名硯水。正與赤間關相對。	文字	11月1日・晴	金世謙『槎上錄』（1636）
17	浦口窈窕。○▲白沙長松。＊觸處如畫。	宮州	9月2日・晴	任守幹『東槎日記』（1711）
18	浦邊人家。幾數三百戶。●俯竹蒼松。叢鬱山園。	上関	7月大16日・晴	金指南『東槎日記』（1682）
19	與三面諸山。相空為海。山根浸海處。削石為堤。平整如截。●夾以松杉橋抽百果之林。蒼翠四擁。皆倒影在水。＊人皆至此。＊詫第一觀。	鞆浦	8月28日・晴	申維翰『海槎錄』[上]（1719）
20	後有位山。●松杉蒼鬱。人家櫛比。商船簇立。左右埠頭。雙建燈臺。＊亦一勝處也。	多渡津	4月15日・晴	李ホン永『日槎集略』[地]（1881）
21	及至室津歷兵庫。迤及大坂。廣野寬平。○白沙如帶。	室津～兵庫	4月大6日・晴	慶暹『海槎錄』（1607）
22	到此始見水田之鏡。◎百餘里間青松白沙。一望無際。	明石	8月30日・晴	南龍翼『扶桑錄』（1655）
23	○▲白沙長松。逶迤臨海者數十里。人家纒映相連矣。		9月14日・晴	任守幹『東槎日記』（1711）
24	山水清麗。○白沙如練。便有我端[長瀧]。楊[楊州]間物色。而津頭船隻。可以萬計。沙上松根。殆遍億數。	兵庫	4月20日・晴	曹命采『奉使日本時間見録』（1748）
25	自河口至大坂。…●一邊青松簇立籬。往往洲渚之間。△平沙露膏。蘆荻吐花。白鷗游泳。千百為群。兩岸人家。不啻櫛比而鱗次。其中粉牆綺繞。樓閣參差。▲竹塹松遷。最為清絕者。自關前船隻次知人小濱民部正之家也。	河口～大坂	9月小5日・晴	南龍翼『扶桑錄』（1655）

注) ◎：白砂と青松を一体的に捉えた表現。○：白砂の表現。●：青松の表現。△：砂の表現。▲：松の表現。＊：評価の表現。なお「原文」欄の網かけは「白砂」および「青松」に相当する表現を、「No.」欄の下線は既往知見で言及のあった用例を示す。

と記した (No. 2)。松からは色彩を排し、数量の漢字を使わず、その代わりに林の形象を加味した。宋希環 (1420) による対句の表現が白沙の長さや面積当たり松の数量からなる稠密感を連想させるとともに鮮やかな色彩対比が目立つこと (No. 1) と照らすと、申叔舟は下絵を描くような、あるいはモノクロームの世界を描こうとしたような対照的な表現となっている。

なお、申叔舟が日本僧侶の壽蘭に贈った七言古詩には、「白沙十里松萬株。」(『保閑齋集』卷 11, 1487) のように白砂と松を一句に合わせた表現がある (No. 2)。詩文には、散文とは異なり韻律があるため、余韻嫋嫋の文章となる。七言詩なら 2 字-2 字-3 字または 4 字-3 字の間で、楽譜でいうブレスやカエスーラ (中間休止)、あるいは少し間をとらなければならないからである。作詩者や読詩者が休止を守らないと解釈が変わる場合も発生するので、特に注意を要するとされる。すなわち、申叔舟は七言古詩のリズムを利用して、休止によって「白砂青松」が浮かんでくるような表現をとっているのではないかと考えられる。このような場合、一方の色彩は抜けているものの、白砂+青松の形式に類似した表現であると考えられる。

南龍翼 (1655) は大阪へ向かう船上からの眺めを「一邊青松簇立籬。往往洲渚之間。平沙露鶯。」と記した (No. 25)。先の宋希環や申叔舟らのような関心とは異なり、一辺の青松が曲線的に海岸を取り囲む姿をとらえるとともに、白砂が波間に現れる様子を表現している。静的な海岸の状況を描くことによって、動的な風景を引き立たせようとしたのではないかと考えられる。

任守幹 (1711) は、通過する船上から捉えた宮州に対して「浦口窈窕。白沙長松。」(No. 16) と、明石浦に対しては「白沙長松。逶迤臨海者數十里。」(No. 23) と記した。長松の表現を用いているが、數十里とあるところから、個別の松よりも松原が続く様子に着目しているものと推察され、白砂+青松の場合と類似したとらえかただと考えられる。さらに、全体の形象についても宮州については奥まって静かであること、明石浦については松原が海岸をぐらりと囲んでいることを補足している。前出の南龍翼 (1655) や白砂+青松における申維翰 (1719) 同様、湾曲した松林を捉えようとしているようだ。

以上より、色に抜けがある事例については、白砂+青松の場合とその関心が共通することが多く、概ね言葉上、あるいは詩文のリズムに応じた変形として理解することができる。ただし、松の色をあえて排することで、モノクロームの世界を創出するような、新たな用例も見ることができる。

(3) 白砂が青い whichever のみの用例 (○あるいは●)

白砂のみの用例については、慶暹 (1607) が島からの出航の際に眺めた博多に対して「遠望南邊一帶。稍分山岸。白沙如雲。」(No. 3) と記し、航海中に室津から兵庫に至るまで続く白砂を見て「廣野寬平。白沙如帶。」(No. 21) と記したのが初出である。その後、姜弘重 (1624) は小倉を通過する際に「白沙翠竹。綿連十里。」と記し (No. 12)、任統 (1636) は藍島浦から海を越えて見える博多に対して「浦越西北有白沙平原。」と記した (No. 5)。南龍翼 (1655) も、藍島を出て博多を過ぎる際に「白沙青松」の表現とともに、「平沙鋪白雪霜堆。」と記した (No. 9)。

さらに申維翰 (1719) も、藍島を出航してから突然風が弱まり船の進みが緩やかになった際に、船窓の下に腰かけてあちこち見まわしてみると、「右邊悉青山。山根往往帶白沙。」が目に入ったと表現し (No. 11)、曹命采 (1748) は兵庫に着いて船上あるいは陸上でその周辺を見まわして「山水清麗。白沙如練。」と記した (No. 24)。

これらの用例からは 2 つの傾向が見られる。ひとつは、慶暹 (1607) から始まり、砂の白さに着目して「雲・雪・霜・帯」のようなたとえを用いるものである。もうひとつは慶暹から始まり、

白砂の広がりや山との取り合わせによって捉え大景観を描くものである。このような感覚は、白砂+青松とは異なるものの、山の青との対比という点では類似するものである。

青松のみの用例については、金指南 (1682) が上関で宿泊するために上陸した際、浦口の周辺を見まわして「脩竹蒼松。叢鬱山園。」(No. 18) と記したのが初出である。以降、申維翰 (1719) は鞆浦にて船上や日と山から港を眺めて「夾以松杉橘柚百果之林。蒼翠四擁。」と記し (No. 19)、李ホン永 (1881) は多度津に寄港した際の船上や陸上からの眺めを「後有位山。松杉蒼鬱。」と表現した (No. 20)。いずれにおいても、白砂あるいは白との対比を見ることはできず、白砂青松を追究する際には重要度の低いカテゴリといえよう。

なお、「青」を意味する他の漢字として、蒼や翠が単一あるいは複合的に使われているが、全ての使行録のなかで「青」がこれらの漢字で代替されたのは 17 世紀末ころからであることを併せて確認した。

(4) 沙または松のみで色を含まない用例 (△あるいは▲)

任守幹 (1711) は藍島に停泊してから博多一带を眺めて「一帶平沙横亘數三十里。」と記した (No. 10)。「白」の漢字を含まないが、(3) で示した、白砂の広がりや捉えた用例に類似している。

松についての用例には、申叔舟が日本僧侶の海雲に与えた詩文の一句として「霸家臺畔松萬株。」がある (No. 2)。また、姜弘重 (1624) は大風が吹いて藍島で留まることになった際、来訪した日本僧侶玄方が、博多についての絶句 1 首を書いて見せたことを記した (No. 4)。玄方の「十里松林七里灘。」の表現について姜弘重は、十里の松林も七里の灘も博多にあることを付記している。

黄ホ (1636) も使行日記のなかで玄方の話を参照して、「所謂十里城下松浦者。亦在博多地方。」と記し (No. 7)、同行した金世濂 (1636) も、黄ホの詩に次韻する中で「十里松林對赤關。」と記した (No. 6)。博多以外での用例は、金世濂 (1636) が文字 (現門司) を過ぎる際に船からの様子を「岸上有廟。繞以松林。」と記した (No. 16) や、申維翰 (1719) が小倉を通過して航海する際に記した「爰有古松高杉橘柚之園。森森挺挺。認作琪林玉樹。」の表現がある (No. 13)。

いずれも (3) でみた青松の事例よりは白砂+青松の描写に近いが、白砂を意識せず、遠景に松林をとらえたものと考えられる。

4. 韓国に伝わる白砂青松に類する表現

3 章の結果を概観すると、白砂青松という表現は、概ね白砂+青松の用例において引き継がれており、それに類似するもの、および派生するものとして、白砂+松、青松+沙の用例があるようだ。そこで本章では特に、「白砂」+「青松 (および青に類する語)」の用例に注目し、韓国古典総合データベースによる検索を行い、「白砂」と「青松」が同じ場面で描写される用例 (61 件) を選別した。なお、「すな」の漢字は「沙」のみで、「白砂」の用例はなかった。この結果と、使行録における「白砂+青松 (3 章の◎)」の用例 (No. 54 を含む 7 件: 「書名」欄に◎で表示) を合わせて、著者の生没年順に用例を整理したのが表-3 である。生没年順とするのは、個人文集が著者の死後に子孫や弟子などによって編纂・刊行年されるためであり、そのために表内の順序のみで用例間の影響関係を論じることはできないことは留意されたい。

全体をみると、「白砂-青色系 (蒼・翠・碧) の松」、「白砂-松の別称 (蒼官・蒼髯)」が一般的な組み合わせだが、白砂の代わりに明沙・晴沙・玉沙が青色系の松と組み合わせるものや、色彩と対象の順番が変わることで、修飾関係 (「白砂-青松」・「青松-白砂」) ではなく主述関係 (「沙白-松青」・「松青-沙白」) を成すような新しい組み合わせの用例が見つかった。

これらの組み合わせについて、表-3 の No. 欄に、無印 (白砂-

表-3 個人文集における白砂青松の用例

No.	原文	著者 (生没年)	『書名』巻次
1	坐躡白沙地。掛巾青松枝。	李 穡(1328-1396)	『牧齋集』詩集卷32
2	只有白砂青松故名。;	宋希環(1376-1446)	◎『日本行録』
2*	〔詩〕沙堤千頃白。松木萬條青。		
3	白砂周道環蒼官。	成 俔(1439-1504)	『虛白堂集』詩集卷9
4	白砂如雪映蒼松。	同上	同上卷10
5	蒼松岡下白沙堆。	金克成(1474-1540)	『養亭集』卷1
6	蒼松白石更明沙。	鄭士龍(1491-1570)	『湖陰雜稿』卷3
7	蒼松白沙路。	林德齡(1496-1568)	『石川詩集』卷3
8	廣岸白沙明復細。蒼官萬本蓋十里。	崔 演 (1503-1549)	『良齋集』卷4
9	蒼松夾路。松外明沙。	洪二祐 (1515-1554)	『耻齋遺稿』卷3
10*	沙白海青松翠路。	楊士彦 (1517-1584)	『蓬萊詩集』卷1
11	白沙青松。	未 詳	◎『癸未東槎日記』
12	瀟瀟白沙平鋪。周可數畝。丹楓翠松。	林 芸 (1517-1572)	『隱齋遺稿』卷2
13	蒼松萬株。外有洲白沙如雪。	具鼎齡 (1526-1586)	『存齋集』卷4
14	蒼松遶周丹楓。十里明沙踏暹鳥。	具思孟 (1531-1604)	『八谷集』卷2
15	青松白沙織戎窟。	具思孟 (1531-1604)	同上
16	蒼松隱影白沙光。	尹斗壽 (1533-1601)	『眉齋遺稿』卷2
17*	亂松蒼翠間紅花。路盡林間見白沙。	裴二益 (1534-1588)	『齋圃齋集』卷1
18	十里蒼松夾路生。白沙如雪踏暹鳥。	裴二益 (1534-1588)	同上卷2
19	長松纏翠。白沙如雪。	成 渾 (1535-1598)	『牛溪集』卷6
20*	沙白青松是嘉華。	李廷義 (1541-1600)	『四留齋集』卷2
21	行出青松隱白沙。	尹安性 (1542-1615)	『觀齋遺稿』卷1
22*	松老翠頭頂。深柳鳴幽鳥。晴沙立炯鷗。	金 涌 (1557-1620)	『雲川集』卷2
23*	萬樹青松一徑斜。水邊沙清溪上月。	李尙毅 (1560-1624)	『少陵集』卷1
24	以白沙爲襟帶。以青松爲藩籬。	金尙憲 (1570-1652)	『靜陰集』卷38
25	白沙淨石。鋪列瀟瀟。翠松碧樹。	趙韓禧 (1572-1631)	『玄洲集』卷15 上
26*	偶出瀉溪坐白沙。楓丹松翠映清波。	朴 綱 (1583-1640)	『天淵集』卷1
27	瀟西有白沙青松。	李 植 (1584-1647)	『澤堂集』別集卷1
28	長松數十里蔭映白沙。;青松白沙。	申翊聖 (1588-1644)	『樂全堂集』卷7
29	白沙蒼蒼。碧松列立。	李景奭 (1595-1671)	『白軒集』卷31
30	家家翠竹蒼松。處處晴沙白石。	李明漢 (1595-1645)	『白洲集』卷1
31*	最是白沙峯。蒼松紅無數。杉松翠幾重。	姜哲年 (1603-1681)	『雪峯集』卷11
32	滅没平蒼松白沙之逕。	宋時烈 (1607-1689)	『宋子大全』卷141
33	白沙青松。	尹宜舉 (1610-1669)	『魯西遺稿』續卷3
34	青松白沙。	俞 瑒 (1614-1690)	『秋潭集』卷之貞
35	蒼松古木。白沙翠竹。	金壽興 (1626-1690)	『愚齋堂集』卷10
36	青松影裏天花墜。佛燈明滅沙彌侍。	李夏鼎 (1628-1682)	『萬堂遺稿』冊1
37	白沙青松。	南龍翼 (1628-1692)	◎『扶桑錄』
38	百餘里間青松白沙。	南龍翼 (1628-1692)	◎同上
39	白沙青松會海嶽。(右海棠岸);長堤白沙平如巖。赤甲蒼髯分巨網。(右越松亭)	姜錫圭 (1628-1695)	『警齋遺稿』卷5
40	白沙平鋪。長松簇立。蒼髯白甲。	姜錫圭 (1628-1695)	同上卷8
41	明沙白石路回谷。綠柳青松岸兩邊。	朴世堂 (1629-1703)	『西溪集』卷3
42	間以白沙翠松。	朴世堂 (1629-1703)	同上卷8
43	萬樹蒼松十里沙。; (又) 此日道逢踏玉沙。	李 選 (1631-1692)	『芝湖集』卷1
44	(大松亭) 有白沙汀。蒼松數百株蔭其江。; 蒼蒼松蓋薄陰成。白沙汀掌樣平。	柳命天 (1633-1705)	『退堂集』卷4
45	名亭向立翠松阜。軒外明沙漾素濤。	金昌翁 (1653-1722)	『三淵集』卷8
46	村烟野田白沙青松。	權斗經 (1654-1725)	『雪齋遺稿』卷12
47	有白沙長川。蒼松翠壁。	李喜朝 (1655-1724)	『芝村集』卷19
48	青松蒼翠。白沙沿嶺。;	金昌業 (1658-1721)	『老稼齋集』卷1
49	間以白沙翠松。[朴世堂]	權 絳 (1658-1730)	『離村遺稿』卷8
50	青松入幽篁。白沙行清嶺。	金昌錫 (1662-1713)	『圃陰集』卷1
51	蒼松隱白沙。	李賀麟 (1664-1700)	『三秀齋集』卷2
52*	日白沙浩渺。萬松叢翠者寒松也。	蔡彭胤 (1669-1731)	『希菴集』卷2
53	蒼巖巖翠松。白沙映幽花。	李 東 (1677-1727)	『鏡齋遺稿』卷1
54	滿山皆蒼松冬柏。地淨甚。被以明沙碩草。	申繼翰 (1681-1752)	◎『梅嶺錄』[上]
55	夾以白沙青松。	申繼翰 (1681-1752)	◎同上
56*	蔭森松翠列。晴沙若鋪雪。	吳 瑗 (1700-1740)	『月谷集』卷4
57	白沙蒼松。	曹命采 (1700-1763)	◎『奉使日本時見録』
58	蒼松挾路盡明沙。	趙載吉 (1702-1762)	『慎齋集』卷1
59#	松青沙白小圓丘。	李繼恭 (1710-1760)	『夜臺集』卷2
60	白沙青松相糝紆。	金鍾秀 (1728-1799)	『夢梧集』卷1
61	蒼松萬株。白沙如雪。	黃鳳錫 (1729-1791)	『鏡齋遺稿』卷24
62*	萬松蒼黑裏。忽地散明沙。	朴道源 (1739-1807)	『錦石集』卷2
63*	沙白青松。	柳得恭 (1748-1807)	『冷齋集』卷15
64*	明沙聚成嶺。其上松林青。	成海應 (1760-1839)	『經濟全集』卷3
65	丈人折簡相期于小青門外蒼松白沙之間。	洪貞弼 (1776-1852)	『梅山集』卷28
66	蒼松白沙。	柳政明 (1777-1861)	『定齋集』卷25
67*	沙白松更青。	趙斗淳 (1796-1870)	『心齋遺稿』卷1
68#	松翠沙明。	郭鍾錫 (1846-1919)	『悅宇集』卷149

青松), 網かけ(青松-白沙), * (沙白-松青), # (松青-沙白) で示した。概観すると, 白沙-青松(無印)の用例の初出は14世

紀と最も古く, 件数も25件と多い。青松-白沙(網かけ)も29件と用例は多いが, その初出は1世紀以上後となっている。沙白-松青(*) および松青-沙白(#) はそれぞれ5件, 2件と用例は少ないが, 沙白-松青の初出は白沙-青松に次いで古い。青松-沙白の初出は18世紀であり, 比較的新しい表現だと考えられる。

これら4つの組み合わせ以外の用例(No.欄に「?」を付したものの:10件)については, 本研究では扱わないこととし, 以下に各組み合わせの特徴を整理する。

(1) 沙白-青松(全25件, No.欄は無印)

既往知見で白砂青松の語の起源とされてきた宋希環より古い用例が見つかった。雨を冒して都城の東方へ赴き葬儀に参列したあと漢陽に帰る途中, 昼食をとった場所での悲哀を, 帰城してから思い返して詠んだ李穡(1328-1396)の詩である(No.2)。白沙と青松を対句させ, 「白沙場の上に筵のようなものを敷いて座る。」ことと「青松地に頭巾を脱いで掛ける。」ことという2つの行為を表現した。座ったまま手が枝まで届くほど松が低いのか, あるいは枝が地面に垂れ下がっているのだろうか。いずれにせよ, 使行録でみたような白砂青松の描写内容とは趣向が全く異なっており, 李穡の詩文がのちの白砂青松へと引き継がれたとは考えにくい。

以降は, 成俔(1439-1504)によって白砂と青松の別称「蒼官」との組み合わせが出はじめ, 青松が白砂を囲むさまや, 覆いかぶさる様子が詠まれた(No.3)。色彩対比としては「白沙如雪映蒼松。」のような表現も残した(No.4)。また, 古い用例では白沙と翠松・松翠は分離して表現されているが, 朴世堂(1629-1703)が七松亭に対して「白沙翠松」と連続させて使い始め(No.42), 後の權絳(1658-1730)の文集にも同じ表現を確認することができる(No.49)。同時代の人物だった姜錫圭(1628-1695)の, 「白沙平鋪。長松簇立。蒼髯白甲。」では, 青松の別称として「蒼髯」が用いられ, 白沙地から青い松葉に視線をスムーズに移動させるような表現となっている(No.39, 40)。

(2) 青松-白沙(全29件, No.欄に網かけ)

白砂-青松の順序を逆転させて記し始めた人物は, 金克成(1474-1540)であり, 松や松岡からその地盤となる白砂へ視線が移されるように詠んだ(No.5)。このような設定をすることで, 青色系の松に, 様々な特質(明度ないし彩度あるいは質感, 粗度など)を表す沙が対比されるようになった(No.6, 9, 14, 30, 36, 43, 45, 54, 58)のではないかと考えられる。また, 申翊聖(1588-1644)は「青松白沙。」とともに「長松數十里蔭映白沙。」と記し, 長く続く松林の蔭が白砂に映えることを見出した(No.28)。蔭を介して青松と白砂がひとかたまりとなったようだ。このような描写は既に具思孟(1531-1604)の用例(No.14)にもあり, 引き継がれていった(No.16, 48, 51)のではないかと考えられる。

(3) 沙白-松青(全5件, No.欄に*)

宋希環による使行詩にある「沙堤千頃白。松木萬條青。」の対句的表現(No.2)が初出のようだ。詩文であるが使行が目的だったため, 写生するように詠んでいる。また, 偶然か意図したのかは不明だが, 下平聲九の韻目「青」韻に属する字を用い, 「屏・汀・青・亭」を押韻とする五言律詩1首を作りあげた。この押韻を原韻とするほかの用例はDB検索を行っても見当たらなかったが, 韓国では次韻の伝統が12-13世紀から見られるので, 宋希環も意図したのかもしれない。そして, 後の文人もその意図や美しさを知っていたのか, 引き続き「沙白海青松翠路。」(No.10), 「沙白青松是嘉華。」(No.20), 「沙白松青。」(No.63), 「沙白松更青。」(No.67)のような類似する表現が生まれた。

(4) 松青-沙白(全2件, No.欄に#)

ここまでみてきた組み合わせでは, 白沙-青松や沙白-松青のよ

うに、2つの語の構成は並列の関係（修飾と修飾、主述と主述）をなしていた。しかし松青-沙白の場合、「松青沙白」や「松翠沙明」のような連続した語の初出より前をみると、「松青・松蒼翠・松翠・松蒼」などに対して、語の構成が合わない「白沙・晴沙・明沙」などの用例を確認することができる（例外の No. 17, 19, 22, 56, 62）。そのような試行錯誤の時期を経て、李麟祥（1710-1760）や郭鍾錫（1846-1919）によって、この組み合わせ（No. 59, 68）が生みだされたものと考えられる。

5. 白砂青松の起源付近における日韓両国の影響関係

両国において各々起源とされた今川了俊（1371）と宋希環（1420）の記録の間には、50年ほどの隔りがあり、2人の文化的な接点が無かったため、日韓両国が中世から既に白砂青松の語で表現される風景の内容を共有していたという仮説を証明する方法が見つからなかった。しかし、本研究の作業によって、今川了俊（1326-1414?）と同時代の人物であった李穡（1328-1396）の用例が発見されたので論考を加えたい。

今川了俊と韓国との関係は、1377年に高麗（918-1392年）修信使として鄭夢周（1337-1392）が訪日し、今の九州に上陸した時から始まり、18年後に今川氏が九州探題職を退くまで続いたとされる¹²⁾。鄭夢周が来日して今川了俊に対面した記録は、鄭側の記録として『高麗史』列傳「辛禰偏」¹²⁾と、今川側の記録として『人物叢書今川了俊偏』「対外交渉」¹³⁾に見られる。前者によると、1377（禰王3）年9月に訪日して翌年7月に日本から還朝する際に、九州節度使の源了俊が、今川了俊の臣下周孟仁を随行させ送ったという。また後者には次のような記述がある。

高麗辛禰王の三年（1377）、卓越した学者で一代の名臣とうたわれた高麗王朝の鄭夢周が、海賊鎭臣の交渉のために日本に派遣され、幕府に折衝を開始した。今川了俊が肥後の陣から急ぎ博多に帰ってきたのは『探堀家文書』、幕府の出先機関の首長として鄭夢周の来朝に應待するためであったと思われる。この間、鄭夢周が詩に長じているので、その詩を求める者が博多に雲集したといわれている。彼は後に「使いを日本に奉ずる詩」若干（鄭圃隱奉使時作13首）を賦しているが、その中に、今川了俊（地主）が酒を彼に送るなどして歓待し、「人情猶待むべし」とよこばせたことを詠いこんでいる。

南北朝・室町初期の武将で歌人であった今川了俊と、同時代に高麗末の学者で文人であった鄭夢周が詩文を唱和した記録は見当たらない。しかし、臣下を随行させ高麗に派遣したことを見ると、今川了俊と朝鮮との関係は続いた可能性がある。

また、鄭夢周は李穡の親友であり、韓国の「麗末三隱」とは、陶隱李崇人とこの2人、圃隱鄭夢周・牧隱李穡である。2人は日本人との詩文唱和も行った。例えば、鄭夢周の個人文集『圃隱集』第2巻には「次牧隱先生詩韻。贈日東茂上人。：時日本僧永茂欲遊五臺山」という題目の詩があり、李穡の詩を次韻して日本僧侶永茂に贈ったことがわかる。同様の内容は、鄭道傳の『三峯集』第2巻にある「次韻題日本茂上人詩卷」の詩にも見られる。後者の記録には1390年使行を終え開京（現開城）に在住の時、日本僧永茂が来て石房寺に留まったこと、五臺山を遊覧しようとしたことも記されている。また、李穡の『牧隱集』第12巻には「日本釋弘慧求詩」の詩があり、僧侶弘慧の求めに応じて送別の心境を詠んでいる。

その後、日本にも李穡の文集が伝えられた。李徳河（1561-1613）の隨筆『竹窓閑話』には「頃年倭使玄方之來。亦請牧隱集而去。倭國亦知文章之高妙而然耶。抑曾聞中國文人之言。而求索耶。未可知也。黃洪憲天使時。宣祖於經筵。問東國文章何人爲首。蘇齋栗谷皆以牧隱爲對云。」とある。李穡は高名な詩人であり、日本でどれほど知られていたかはわからないものの、少なくとも使臣として訪れた日本僧侶玄方が李穡の文集を請い求め、日本に持ち帰

ったということが読み取れる。

以上のような両国のつながりの積み重ねを考えると、今川了俊と李穡にも間接的な接点の可能性はあり、白砂青松の起源付近において既に影響関係があったのではないかと推測される。

6. おわりに

本論は日韓両国間における白砂青松の言葉の起源と、その変遷を明らかにするための研究であるが、双方の先行研究やデータには不均衡があるために、両国について同じ方法を採用することはできなかった。しかし、互いに使節団を派遣し、古くから外交および文化交流を行ってきた事実があり、韓国における白砂青松の言葉の変遷を知ることは、両国における風景観の比較や、日本の風景の把握にも有用な知見となるだろう。

特に韓国古典総合データベースの活用によって、新たな用例の発掘が可能となり、日本では知られてこなかった韓国での起源に迫るなど、幅広い時代の多彩な表現を得ることができた。さらに両国間の交流場面の追跡も可能となり、両国で起源とされる人物のつながりをとらえ、間接的な接点の可能性を示すことができた。

白砂-青松、青松-白沙のような表現は使行文学内でも修辞法の工夫がみられたが、個人文集の分析によって沙白-松青、松青-沙白の用例も確認でき、これら4つの組み合わせについて、白砂と青松からなる多様な捉えかたと変遷を特徴付けることができた。

しかし、本論では「白砂青松」の起源と表現の多彩さのみに注目して考察を行ったため、以下の組み合わせを超えた影響関係や白砂青松以外に描写されている他の対象や価値評価との関係性については考察しなかった。これは今後の課題とする。また、白砂青松という風景の様相や風景観の展開を議論するためには、単に言葉を追うだけでなく、表現された場所の状況やその変遷を把握すること、それに照らしつつ表現様式の展開を追究することなどが必要になってくるだろう。

補注及び引用文献

- 1) (社) 日本の松の緑を守る会編（1996）：日本の白砂青松—〇〇選：日本林業調査会，ip, xiip
- 2) 未詳：「自然豊かな海と森の整備対策事業（白砂青松の創出）」全国で23地区を選定：国土交通省ホームページ
<https://www.mlit.go.jp/river/press_blog/past_press/press/200007_12/00719index.html>, 2000. 7. 19 更新, 2011. 2. 17 参照
- 3) 韓国古典翻訳院によって構築され、2010年1月末からインターネット上に開始（URL: <http://db.itkc.or.kr/itkcd/mainIndexIframe.jsp>）され、キーワード検索を通じた閲覧が可能になった。本論で扱う韓国文集叢刊（個人文集）と国学原典（対日使行記録の集まりである『海行叢載』はこれに属する）の2011年までのDB構築率は、各々84.2%、100%であった。「韓国文集叢刊」は2012年まで完刊かつ閲覧ができるようになる予定である。なお、このような網羅的なデータベースが日本にはないため、同様の作業を日本の文献を対象に行うことは現段階では難しい。
- 4) 志賀重昂（1894）：日本風景論：政教社，143-144pp
- 5) 中村良夫（1982）：風景学入門：中公新書，69-70pp
- 6) 木村三郎（1991）：白砂青松考—その造園史的意識について—：造園雑誌，54（5），40
- 7) 同上，39-40
- 8) 岡田利幸（1994）：松—日本の心と風景—：人文書院，186-189pp
- 9) 西田正徳（1999）：瀬戸内海における海岸景の変遷，ランドスケープ研究，64（5），479-481；483-484
- 10) 小田隆則（2004）：海岸林をつくった人々：北斗出版，175；177pp
- 11) 宋希環（村井章介校注）（1987）：老松堂日本行録—朝鮮使節の見た中世日本—：岩波文庫，66；202pp
- 12) 姜尚雲（1966）：麗末鮮初の韓・日関係史論—韓国と日本の今川・大内両諸侯との関係—：国際法學會論叢，11（1），17
- 13) 今川了俊（稲田利徳校注・訳）（1994）：中世日記気候集：小学館，394p